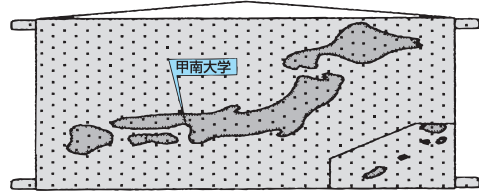


Zephyr

〈第80号〉

ゼフィール・にしかぜ



<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊甲南大学におけるコロナ禍での外国語授業》

★所長からのメッセージ：コロナ禍における国際言語文化センターの外国語教育	金 泰虎	2
〔英語〕 Bringing Online Teaching Tools into the In-Person Classroom	Gregory SHOLDT	3
〔ドイツ語〕 甲南大学におけるコロナ禍の下での外国語授業—ドイツ語の場合—	野村 幸宏	4
〔フランス語〕 コロナ禍でのフランス語の授業の具体例	中村 典子	5
〔中国語〕 アフターコロナ時代の中国語に向けて	石井 康一	6
〔韓国語〕 コロナ禍における韓国語教育の実践	金 泰虎	7
〔日本語〕 コロナ禍での日本語の授業について	谷守 正寛	8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

Further Considerations About Language Education Under the Pandemic and Beyond

The July 2020 special issue of Zephyr predictably focused on perhaps the most pressing challenge facing most of us educators at the time—adjusting to online teaching and the related technology. Mention was also made of applying what was learned through this experience to our post-pandemic teaching. Since then, this process of adjustment and refinement has continued together with the quest for new methods and tools to teach more effective online lessons.

However, it has also continued to evolve and expand as the emphasis has progressed to more intense reflection about issues such as the respective merits and demerits of asynchronous versus synchronous online lessons, the extent to which online lessons can foster student communication, how to better orient students toward making the most of their online learning experience, and how to cope with changing administrative policies, to name just a few.

In addition, many of us are now giving more detailed consideration to applying our newly acquired tools and methods to our current and future classroom teaching. The return to mainly classroom teaching has been compelling us to adjust to other significant aspects of teaching under a pandemic; for example, effectively conducting in-person communicative lessons under the constraints posed by social distancing regulations, alleviating student anxiety about attending in-person lessons, being required to switch back and forth between online and in-person lessons during a semester, and other challenges requiring creative solutions by teachers at both the individual and team levels. Hence, while this issue of Zephyr is an update and continuation of the July 2020 issue, it also further expands the topic to explore and reflect upon a wider variety of challenges inherent in teaching language and culture courses during a pandemic and how this will impact our post-pandemic teaching as well.

(Stanley KIRK)

コロナ禍における 国際言語文化センターの外国語教育

国際言語文化センター所長 金 泰 虎

グローバル化に伴い国境を越えた人々の移動が激しいせいでしょうか。今世紀に入り、世界的に感染症が大きな問題として浮上しています。これらの感染症は記憶にも新しいサーズ（SARS：Severe Acute Respiratory Syndrome）＝重症急性呼吸器症候群、エボラ出血熱、マーズ（MERS：Middle East Respiratory Syndrome）＝中東呼吸器症候群を取り上げることができます。

これらの中でも 2002 年 11 月に中国広東省で生じた発症例を発端としたサーズ、そして 2015 年に韓国で中東に渡航歴のある帰国者を介して流行したマーズは、日本にまで影響を及ぼしていました。一方、2014 年～2016 年頃にかけて西アフリカを中心に大流行したエボラ出血熱は、ほぼアフリカ大陸だけに留まることになりました。何よりも上記の感染症は、それほど学校教育には大きな影響を与えていませんでした。

しかし、今のコロナ（COVID-19）禍は世界的に大流行をしており、学校教育にまで影響が及んでいます。コロナ禍が日本社会に影響を及ぼしはじめたのは、2020 年 3 月頃からです。日本を含む世界の各国は、その対策に乗り出していますが、未だに完全な終息までには至っていない状況です。

コロナ禍が医療や経済はもとより学校教育にも甚大な影響を及ぼしている中で甲南大学は、いち早く「甲南大学授業対策会議」を設置し、コロナ禍の感染状況に応じた授業対策を講じています。国際言語文化センターは大学の方針に基づき外国語教育を実施しています。

2020 年度は 4 月初旬から開講をせず、4 月後半に開講時期をずらしたり、対面授業ではなく Web 授業に切り替えたりしていました。なお、政府が発令する「緊急事態宣言」・「まん延防止等重点措置」などの状況に応じて授業の形態を決め、途切れのない教育に全力を尽くしています。以下は、甲南大学授業対策会議が提示している授業形態の基準です。

第 1 段階：履修登録者数が 100 人を超える（目安）対面授業を、ウェブ活用授業とする。

第 2 段階：ゼミ・実験を除き、全ての対面授業をウェブ活用授業とする。なお対面授業として実施するゼミ・実験についてもローテーションなどの対応を追加することがある。

第 3 段階：すべての授業をウェブ活用授業とする。

このように、甲南大学では、コロナ禍の感染状況に応じて上記の 3 つの段階に分け、授業の形態を決め教育を行ってきています。つまり、第 3 段階は緊急事態宣言、第 2 段階はまん延防止等重点措置、そして第 1 段階は第 2・3 段階ではないものの、コロナ禍が完全に終息していない状況における授業の形態を示しています。この他にもキャンパス内に滞在する時間帯当たりの上限人数を 2500 人まで、そして「学生の行動様式」・「教員の留意事項」など独自のルールを定めています。

とりわけ、多くの非常勤講師を抱えている国際言語文化センターは「担当者会議」、言語別に非常勤講師に対するフォローと連携を通じて Web 授業を行っています。これらの努力もあり、Web を活用する言語教育には支障を来さず順調であると言えます。ところで、基礎外国語はたとえ第 1 段階に当たる対面授業の実施であっても三密を避け講義室の数にも配慮しつつ、全クラスを 3 グループに分けて 2/3 は Web 授業を行うようにしています。

この 2 年にわたるコロナ禍の状況下で政府の発令に応じた対面授業や Web 授業を繰り返していますが、全般的に対面授業に越したことはないと思います。ことに外国語教育における Web 授業では学習者と身近に接することができないことを鑑みると、大きな痛手と言わざるを得ません。そして、Web 授業は初修外国語の学習者だけではなく、学習経験のある外国語の学習者にも大きな負担が強いられていると思います。

一般的に Web 授業は非対面授業と言われています。厳密に言えば、Web 授業も画面越しではありますが、顔を向かっての授業です所以对面と言えます。しかし、対面授業であれ、Web 授業であれ、教育に対する学習者の学習効果や成果が大事なポイントです。対面授業であっても Web 授業の学習効果や成果を下回ることもあり得ます。要するに、授業の形態よりは学習効果や成果を考える工夫を施した教育が重要でしょう。なお、授業をこなすという意識よりは、学習者と一体となって最大限の学習効果や成果を目指した教育を行うという姿勢が必要ではないかと思っています。

Bringing Online Teaching Tools into the In-Person Classroom

国際言語文化センター英語特定任期教員 Gregory Sholdt

Back when the idea of closing campuses and moving course delivery online was first taking root, the buzzword that flew around the social networks connecting language teachers in Japan was *emergency remote teaching*. For teachers serious about their craft, this term helped them recognize that they just needed to do the best they could under the circumstances with the promise that it was only for the short-term. As it turns out, the definition of 'short-term' is open for interpretation and there was plenty of opportunity to move on from those quick-fix approaches and to develop more sophisticated, innovative, and effective online pedagogy. It stands to reason that teachers will be looking to make use of all of their newly developed skills and hard-earned knowledge when they do fully return to in-person classroom settings.

For me, the most significant changes will come in how I manage administrative tasks and duties. Prior to the pandemic, I used the My Konan system sparingly at most; however, online teaching and a reliance on My Konan fostered a new appreciation for a centralized, paperless system for sharing materials and communicating with students. Besides the reduction of waste, I envision moving away from the distribution of paper materials will save classroom time, ensure access to materials, and improve course management. Digital materials can be uploaded at any time, are always available to the students, and can be revised as needed. Digital submission of homework and other assignments allows for strict deadlines that can be observed regardless of student absence, weather cancellations, or train delays. Communication with students is streamlined, easily initiated, and permanently recorded. I have found that assignment feedback, student inquiries, absence issues, and grade reports have all been managed more effectively when done almost entirely online.

Because many of my classroom pedagogical tools were not transferable to an online environment or required significant adaptations, I explored a wider range of online options that I had not previously given much consideration. I made greater use of the online components of my course textbooks and also started using online applications like Flipgrid for making and sharing student videos and Edmodo for asynchronous group discussion. Integrating these tools into the coursework of my in-person classes should add greater variety in my assignment activities and increase opportunity for student interaction outside of the classroom. With the pandemic still an unresolved issue, keeping students connected with these online applications will smooth the transition to online teaching if the need arises again in the future.

While I have come to the clear conclusion that teaching in person in a classroom is preferable and likely more effective than teaching online, it is not a straight victory. There are advantages to online education and it does allow for quality learning to take place. I would like to see this approach left on the table to use in certain situations such as emergency closings, make-up classes, and unavoidable teacher absences. It can be used to provide reasonable accommodations for students with special needs or help students overcome obstacles to being physically present in the classroom. I hope to see greater recognition of its value, increased integration into traditional curricula, and further investment in its development and availability. Most of us are truly looking forward to a complete return to in-person teaching, but I suspect we will come back better than before thanks to our time away.

甲南大学におけるコロナ禍の下での外国語授業 ードイツ語の場合ー

国際言語文化センター准教授 野村 幸宏

授業の枠組みと Web 授業のポイント

コロナ禍での授業は2年目になります。ドイツ語も他言語と同様に、基礎（1年次に受講）が全授業回数の2/3をWeb授業で行っている以外は、原則対面授業です。対面授業では、密を避けるために、受講人数に対してかなり広めの教室を使用したり、使用できる机に制限を設けたりという対策が施されています。また、教員も含め全員マスク着用なので、コロナ以前の授業と同様とはいかないものの、ほぼ授業の日常が戻ってきているという状態です。Web授業が多い基礎クラスでは、昨年の経験を踏まえて、各教員が工夫を凝らしながら、何とかオンラインでも効果的で、言語を学ぶ楽しさを感じてもらえるような授業を作るべく努力を続けています。Web授業では、対面授業の場合に比べて、教員のITスキルや授業に使えるツールに関する知識が重要になるほか、PCを素早く操作しながらクラス全体を見渡し、授業を進行するというマルチタスキング能力も必要とされ、教員にとってもチャレンジングな日々が続いています。また、特に1年生は新しい環境で不安が多い中、Web授業ではクラスの仲間や教員とのコンタクトが不足しがちなため、いかにしてクラスの一体感を出しながら学習していくのか、という部分にも注意が必要です。特に能動的な言語能力をつけようとする授業では、学習者間でアクティブにコミュニケーションを取るトレーニングが重要になるのですが、そのためには、発言しやすい雰囲気と学習者同士、そして教師と学習者の間に信頼感と親近感が持てることが大前提になります。これらをWeb授業でいかにクリアするか、というところが、我々教員が一番苦心しているところではないかと思えます。

「通常授業」との相違点

一方で学生はWeb授業をどう受け止めているのでしょうか。私とネイティブの先生がそれぞれ週に1回受け持つ1年生のクラスで、「ドイツ語のWeb授業で『工夫されているな』と感ずること」と「学生自身が気を付けていること」についてアンケートを取ってみました。すべての意見を原文そのままを記載したかったのですが、紙面の関係で主要なものだけピックアップします。

工夫されていると思う点：「固定の生徒ばかりでなく、生徒が全員授業にかかわれるように全ての生徒に均等に発言させているところ」、「ブレイクアウトセッションを多用して、コミュニケーションを図っているところ」、「金曜日の授業でビデオが付けられていることが、何度も見返すことができ助かっています」、「少しずつ進んでいるので初心者でも安心して学べるようになってると思います」、「実際にペアで会話を行いながら、学習できるので理解しやすいと思います」などがありました。これらをまとめると、授業の進度を学生に合わせ、Web授業でもペアワークを多く取り入れながら、クラスメートと実際にドイツ語を使いながら覚えていく学習に加え、新出事項を説明するビデオを作成して学生がいつでも見られるようにしておく、という点が好評を得ているということが言えそうです。

学生が気を付けている点：「Wi-Fi環境を整えておく」、「スマホでの受講なのでバッテリーの充電に気を付けている」などの使用機器にまつわる意見、「みんなと話すことが多いからテンションを上げて臨んでいます」、「ビデオをONにするときは多めに動くように（身振り手振り）しています」と、オンラインでのコミュニケーションに対する工夫も見受けられます。また「メモを手元に置く」、「聞き逃さないように集中する」など、教室と違い、聞き逃したことを隣の席の人などにすぐ確認できない、授業の流れを止めてその場で質問しにくいといった、Web授業のデメリットをカバーしようと努力する姿も見受けられました。

学生の雰囲気を直に感じる機会が少ないWeb授業では、こうして時折学生の声を集め、まとめてみることで、授業が学生にどのように受け止められているのか、どこをどのように改善すればより学習意欲が高まるのか、という点が見えやすくなるのではないかと思います。学生同士だけではなく、学生と教員間のコミュニケーションもWeb授業の重要な鍵なのかもしれません。

コロナ禍でのフランス語の授業の具体例

国際言語文化センター教授 中村典子

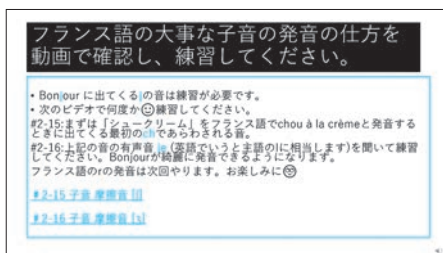
2020年3月11日にWHO（フランス語ではOMS：Organisation mondiale de la Santé：フランス語のサイトは<https://www.who.int/fr/home>）がCOVID-19に関してパンデミック宣言をして以来、本学の授業形態についても大きな変化がありました。原則として対面授業を実施するゼミ・実習・実験などの科目とWeb活用授業が中心となる科目が混在する状況が現在も続いています。ここでは、2021年度の初修外国語としての「基礎フランス語」について説明します。

1年次生が受講する「基礎フランス語」は、他の第2外国語基礎科目と同様、2021年度は、前期・後期の各15回のうち、5回が対面授業になるように設定されました（ソーシャル・ディスタンスを確保できる教室にて授業を実施するため、ローテーション方式で教室を使用）。ここでは、Web活用授業の実際について書きます。

「基礎フランス語Ⅰ」（文法）の初回は、まず、教員の自己紹介を兼ねた「ナレーション付きPPT」を見てもらい【資料1】、その後、Zoomを利用した授業を1時間行いました。2回目以降のWeb活用授業では、授業時間90分間のうち、最初の30分間を、Web上で公開されているフランス語教員の動画【資料2】や教科書の音源を利用した「個別学習」とし、教科書の練習問題も解いてもらいます。その後の60分間、Zoomで「リアルタイム遠隔授業」を実施します。授業の終わりには、全員に3つの表現で挨拶をする習慣を身につけてもらうことができました。【Merci. / Au revoir. / Bonne soirée. / Bon week-end. / À bientôt!などのうちから、3つの表現を各自が発音したのちZoomを退室する練習】



資料1



資料2



資料3

授業実施後は、本学のLMSであるMyKONANに「〇月〇日の授業ノート」（授業実施後の資料）【資料3：中級フランス語Ⅲの例】を提示します。（実は、COVID-19以前から、学生が復習しやすいように、MyKONANを使い、「授業実施後の資料」を継続して提示しています。ただ、COVID-19以前は、MyKONANをチェックしていない学生がいました。）毎回、MyKONANを通じて課題を出してもらい、採点后、個別にフィードバックを送ります。学生ひとりひとりの課題を毎回、確認して採点し、コメントをつけてフィードバックができることはWeb活用授業の利点のひとつだと感じています（教員の側では、Web活用授業のための資料作成、課題の作成・採点、フィードバックなど、仕事が倍増しましたが…）。95%の受講者が毎週、課題を出し、復習してくれる学習継続効果は大きいです。課題の出来具合や小テストの結果から、COVID-19以前より、学生たちの理解度が深まったことが伺えます。

Web活用授業のもう一つの利点は、Web上での課題提出という条件のもと、パソコンやスマートフォンで「フランス語の特殊文字をタイプ打ちできる」ように指導できたことです。MyKONANに参考資料を提示した後、Zoom授業で、画面共有の機能を利用して説明しました。課題の解答に、しかるべき特殊記号がついていないと減点となるため、クラスの全員が難なくフランス語を打っており、IT能力の向上につながりました。さらに、Web活用授業のクラスでは、「授業外の時間」に個別指導が可能であるという利点もあります。ZoomまたはTeamsを使い、「音読小テスト」を半期に1度、個別に実施しています。《マスクなしで、発音を細かくチェック》できるのが嬉しいです。とはいえ、半期15回のうち、対面授業ができる5回がもっとも重要であることには変わりありません。ただ、Web活用授業と対面授業の組み合わせは、外国語学習に良い効果をもたらしています。

アフターコロナ時代の中国語に向けて

国際言語文化センター准教授 石井 康一

◎1年延期の東京オリンピックも終わりました。甲南大学1回生青山華衣さんの女子陸上400メートルリレー出場はうれしいことでした。次のオリンピックも3年後ですので在学中、また楽しみにしたいです。

○甲南大学3回生の投稿を新聞で読みました。「コロナ禍で2年生の前期からオンライン授業が始まり4期目。この間、自宅に閉じこもり時が止まったようです。1年生の時は、サークル活動などで友達もたくさんいました。しかしサークルは中止。大学へ行くことも少なくなり友達も激減しました」。在宅のオンライン授業には利点も多いですが、学生の「孤独感」にどれだけ寄り添えるかを問いかけてられている気がしました。

○私が担当する「中国語学習相談アワー」に来てくれた学部2回生は、オンラインの授業以外にもスマホのアプリ（Hello Chinese）を活用して、中国語検定とHSK（漢語水平考試）でどちらも3級を取得したそうです。次の検定試験に向けての参考書などを紹介しましたが、困難を乗り越えて積極的に学習する姿勢に、こちらが多くを教えられました。みなさんも中国語学習相談アワー（月曜日昼休み、6号館5階中国語・韓国語学習指導室）を活用して下さい。

●2021年10月現在、感染は収まりつつありますが、まだ今後は見通せません。手探りで進めた授業も2年目に入り、もう「不慣れ」の言い訳はできません。私の場合は失敗を繰り返しながらの前進です。年に1度は北京へ行って、外国人向け中国語教材や現代文学や演劇の書籍、映画のDVD等を買って来て授業内容を更新していましたが、最近では以前に買った材料を新しい角度から再検討しています。

◎教室授業・Zoom授業・オンデマンド授業の混在で、学生の都合は色々です。私は授業時間外にもZoomを開設して、歯医者のように予約制、一対一で朗読の発音指導をしています。

○中国へ行けないときは京報網 <https://www.bjd.com.cn/> で新聞を読み、「中国のYouTube」ともいえる优酷（youku） <https://youku.com/> で動画を見ています。また放送局のサイトで直接見られる番組もたくさんあります。グルメドキュメンタリー「舌尖上的中国」 <http://jishi.cctv.com/special/shejian3PC/shouye/> は面白いですよ。

◎改革開放時代の中国ロックを打ち立てた崔健（ツイジエン）ライブも优酷（youku）で見られます。2010年12月31日北京工人体育館でのオーケストラとのジョイントライブ、私は現場で聴いていました。オーケストラとのジョイントといえばKISSやLed Zeppelinも行なっていますので比較考察するのも面白いと思います。YouTubeでも水墨画アニメ『鹿鈴（鹿の鈴）』や人形アニメ『園園的奇怪旅行（園園の不思議な旅）』など中国独自のアニメを見ることができます。

●大阪市で中華料理店を営む成松さんが「料理の道に進むきっかけは、小学校3年のときに家族で行った中国旅行だった。「この国では、何を食べてもおいしいんやな」と感激。30歳までに自らの手で中華料理店を開くと決意した（朝日新聞2016年9月27日）」そうです。無垢の心での異文化体験が新しい可能性を生み出すのですね。私も初めて引率した海外語学講座Ⅱ（夏休みの短期留学）で西安の西北大学（現在の行先は北京郵電大学です）に行き、お昼に大学近辺の食堂で皆と食べた中国料理がすべて美味しく、割り勘だと1人100円ちょっとであることに衝撃を受けました。海外へ行くのが難しいときにも、そういう楽しさを教壇で（あるいはオンデマンドの授業資料で）語り続けたいです。



万里の長城（金山嶺）

[参考図書]

- ① 『SnowManといっしょに学ぼう！中国語スタートブック』 Jリサーチ出版 2021
- ② 門田修平『外国語を話せるようになる仕組み』サイエンス・アイ新書 2018
- ③ 吉見俊哉『大学は何処へ——未来への設計』岩波新書 2021
- ④ 杉野俊子監修『「つながる」ための言語教育——アフターコロナのことばと社会』明石書店 2021
- ⑤ 『コロナ禍の言語教育——広島大学外国語教育研究センターによるオンライン授業の実践』溪水社 2021

コロナ禍における韓国語教育の実践

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

コロナ（COVID-19）禍における Web 授業を実施するに当たり、どうすれば理解しやすい上、学習効果や成果が得られる教育を行うことができるかという悩みは、なかならず言語教育において顕著であると思います。ことに初修外国語は、学習者はもとより教育を行う教員にとっても難しさを実感しています。この中で韓国語教育は学習者の立場に立った授業、つまり Web 授業であっても対面授業に近い教育を実践し、学習者にとって学習効果や成果の高い授業を行う工夫をしています。

まず、Web 授業の形態を分類し、そのそれぞれの特徴について述べて行きます。Web 授業は、大きく3つのパターンに分けることができると思います。1番目は、Web上に授業資料だけを張り付けて置くオンデマンド形式、2番目はWeb上に授業資料の貼り付けなしでZoomを活用し口頭だけで説明を行う形式、そして3番目はWeb上にオンデマンド形式の授業資料を張り付けて置き、それを活用してZoomを通じて口頭で説明を行う形式です。他にもハイブリッド授業、授業を録画して提供する授業の形式などがありますが、これらも3つのパターンの範疇に属すると言えます。

韓国語の教育では、3番目のパターンを取り入れています。その理由については「書く」「話す」技能の特徴に基づいて説明します。そこで、前者は韓国語の文字、後者はWeb授業における発音教育の特徴の観点から述べることにします。



一般論としてWeb上に授業資料を貼り付けておくオンデマンド形式の1番目は、リアルタイムの双方向授業が難しい側面があります。但し、アップしている授業資料をもって何回も復習に活用することはできます。そして、Zoomを通じて説明するだけの2番目の授業を行いますと、学生の質問などに対するリアルタイムの双方向授業はできません。しかし、そもそも言語の学習というのは、ただ1回だけ聞いて身につくものではないと思います。言語の学習では繰り返し行う反復、その反復や再確認を通じて伸張します。とりわけ言語教育に授業資料がなく口頭だけの説明は、学習者にとっては難しさを感じる要因になると思います。一方、3番目の授業は1番目と2番目のそれぞれの長所を取り入れた授業と言えます。つまり、双方向の授業ができ、なお何回も授業資料をもって反復することができるのです。

ところで、韓国語は日本語と類似性がある言語です。とは言え、大学における第2外国語の韓国語は学習者にとって初修外国語なので韓国固有の文字に接したとき、難しさを感じると思います。その理由は、韓国語のハングルという文字はアルファベットや漢字とは違い学習者が習ったことのない文字だからです。Web授業で韓国語教育を行った場合、対面授業よりは正確に文字を書く力が身につかない恐れがあります。ことに韓国語は母音字が多く些細に見える文字の棒は付ける位置によって、その意味が全く通らなかったり、あるいは意味が変わったりすることがあります。この問題点は3番目のパターンを取り入れることによって、Web授業であっても対面に近い授業を行いつつ解決しています。

要するに、韓国語のWeb授業における「書く」技能の教育は難しさが付きまといますが、これを克服するため丁寧に画面上で文字を書いてみせます。一方、学習者には「書く」課題を課し、じっくり書いて、かつ多くの練習をしてから提出するよう促します。初修韓国語、しかもアルファベットや漢字ではない独特なハングル文字を繰り返し書かせて言語の習得を図ります。

次に、概ね言語教育は他の科目に比べて少人数教育とは言え、Web授業では一斉に全員を画面上に呼び出して発音を行ったりする「話す」技能の教育には無理が伴います。これがWeb授業における「話す」技能教育の難しさです。そこで受講者の中で多くて4人、あるいは1人ずつ画面上に呼び出し指導を行います。これでWeb授業に伴う「話す」技能教育の弱点を補います。

このように、Web授業における工夫を凝らした韓国語教育であっても画面越しになるため、学習者にとっては歯がゆいことも多いと思います。この問題点を補うためには、学習者自身が積極的に質問や意見を提示するのが重要なポイントになります。要するに、Web授業だからこそより積極的な双方向の授業、Web授業だからこそチャットなどで簡単に質問ができる利点を活用するよう、学習者に求める教育を行います。

コロナ禍での日本語の授業について

国際言語文化センター教授 谷 守 正 寛

コロナ禍での外国人留学生に対する私の日本語の授業について報告すると同時に、教授における言語運用面はどう変わったかを少しく言語学的に考察したことを述べたいと思います。

昨年度は年度当初よりコロナ禍による ZOOM 等による非対面授業が始まり、後期の途中に一時的に対面があったものの再度非対面授業に戻ったのに対し、今年度は辛うじて幸いにも入学した4月当初は対面授業ができたことは、日本語の授業においては大きな違いをもたらしたと考えます。それはどういうことかということ、入学して最初に教室で直接顔を合わせて、生の声を聴き、生の顔を見て生の空間に漂う雰囲気を感じることで、やはり学生とのラポール (rapport) が形成されやすいということでしょう。画面上の視聴覚的な電子情報のみにはないデジタル化不能な情報が対面環境にはあると言えます。ちょうどコンピュータ音楽の作曲ではキーボードを打つだけで入力される音符の電子データで楽曲が出来上がるにもかかわらず、敢えて人間の手による楽器演奏を電子データに変換して楽曲をデジタル化するとより情感に溢れた音楽が生まれるようなものでしょう。ZOOM 後の授業で再認識したことは、留学生に対する日本語の授業では、マイクとカメラによるデジタル信号では伝導できないものが生の対面空間の状況には含まれ、人間のコミュニケーションとラポールの形成にとって重要で微妙な諸要素が言語習得上の重要な役割を占める、つまり、意見の内容が互いに獲得さえできればよい、或いは言語で表される情報の交換さえできればよいような会議一目的によっては全ての会議がそうではないでしょうが—とは微妙に異なる側面があると感じたことです。

ここで詳細に記述するのは紙幅の関係上難しいので、簡単ながら対話における時間軸上の対話の流れをごく単純に見てみます。日本語では非常に有用な相づちという言語運用は相手に話者が話を聞いているよという合図を送るもので、英語では nod in response 等と言えるので N と表し、話者自身が発話する際に不自然な間を埋めるための「えー」などといった言葉「フィラー」を F で表し、発話文を --[S]-- としましょう。すると一般的な日本語の自然な対話では図1のような感じになると思います。一方、ZOOM の場合は図2のようなイメージになるかと思います。ただし、ここでは実際のデータではなく、言語運用の場面を内省してイメージとして描いたにすぎませんが。

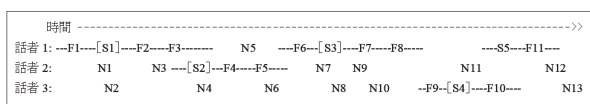


図1：自然な場面における言語運用の風景

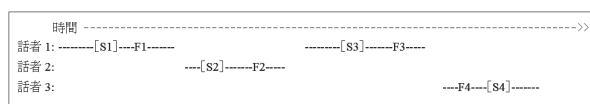


図2：ZOOMによる言語運用の風景

つまり、発話者自身の F は若干残るものの相手からの相づちの減少による影響を受けてやはり減り、餅つきのように活動を互いにかぶせて日本語の会話らしく発話する S も、三次元的に顔の見える環境でないと難しくなるせいか聞く間の沈黙が増えて、めっきり減りますから、このように寂しい発話風景になります。これが言語習得にはやや足かせとなります。

なお、ZOOM による経験から、一般にはパワーポイントによる既成のデータを流すという先入観から解かれ、対面授業になってもスクリーン上でもその場での作業内容を同時に動的に見せるというこれまでやってこなかった手法の良さに気づかされたことです。筆者はワープロソフトに一太郎を使いますが操作内容を瞬時に見せるにはとても便利で、学生の文章添削の過程の作業を写しながら同時に講義をするということで、文字データであってもハンドアウトよりも生き生きとした指導を織り込めるようになったと思っています。